

米づくりは子どもたちにとって いろいろなことが学べる何よりの教材だ



【三重県紀北町発】松永さんの話にはしばしば奥様が登場する。どうしても会いたくなり、無理を言って登場していただいた。さっそうとクルマで乗りつけた奥様のかつ子さんは、小学校教師を勤め上げた熱い教育者だった。米づくりを通した子どもたちへの教えは、お二人のコンビネーションが見事に噛み合っこそ実現したのだろう。固まった土を根気よくほぐして土壌を作り、種を蒔いて草を除き、大雨や台風から守り抜いて育てる。農業と教育には大きな共通点があることに気づかされた。（創刊編集長・奥田喜久男）

子どもたちと収穫した餅米は 餅にして老人会におすそ分け

奥田 松永さんのような方を何とお呼びすればいいんですかね。農業家ですか。

松永 うーん。特に呼ばれたことはないからなあ。職業と言えば私、塾もしているんです。

奥田 農業と兼業で？ どういう経緯ですか？

松永 身体を壊して学校は辞めたんですが、塾なら農業をやりながらでもできるかなと。最初は生徒1、2人だったんですが、どんどん増えて20人くらいになって。

奥田 結構な人数ですね。

松永 いや、それでちょっと大変になって辞めたんですが、どうしても見てほしいという子を、今も6人ほど見えています。子どもたちとの関わりは農業のほうでもありまして。保育園の子たちとじゃがいも掘りを

したり、小学校の子たちの米づくり学習に協力をしています。40年近く続いていますかねえ。

奥田 小学校は何年生が来るんですか。

松永 最初は地域学習との関係で5年生だけだったんですが、いつからか全校生徒が来るようになって。といっても30人前後ですけどね。

奥田 米づくり学習のきっかけは？

松永 今の子どもたちって、農村に住んでいながら田んぼに入ったことがないし、米がどんなふうにしてできるかも知らない。なので、学校に「子どもたちに田植え体験とかどうですかね」と気軽に声をかけたら「ぜひ」となって。

奥田 子どもたちが田植えから稲刈りまでするんですか。

松永 そうです。田植えの時には足を取られてひっくり返ってどろんこになって大騒ぎです（笑）。

奥田 様子が浮かびます。楽しそうだ。

松永 取材もたくさんおいでになります。新聞記者の方とかね。

奥田 ああ、絵になりますねえ。うん。絵になる。

松永 最初は普通の米を作っていたんですが、途中から餅つきができるように餅米にしました。餅つきの時は近所の老人会を招待して、ついた餅を振る舞うんです。

奥田 まあ、うまいことを考えられる。餅つきを通して人のご縁がつながりますね。

松永 餅米は気仙沼にも送ってるんです。東日本大震災の時、甥っ子が会社から応援で行ったことがきっかけで。以来、毎年送っています。

奥田 松永さんはそういうことをお一人で考えつかれるのですか。

松永 自分でも考えますが、女房がですね。「米づくりの過程や稲の病気や雑草との闘い、水管理の苦勞、それらを克服する工夫は子どもにとって勉強



PROFILE 1954年三重県海山町（現：紀北町）生まれ。大阪商業大学経済学部卒業後、地元の小・中学校に講師として勤務。疾病のため退職し、療養しながら実家の農業に従事する。現在は5ヘクタールの「かかし農園」で米やじゃがいも、とうもろこしなどを栽培。春には菜の花やれんげを育て、畑を無料開放している。じゃがいも掘りや米づくり学習で地元の保育園や小学校に協力する一方、個人で子どもたちに勉強を教えている。2010年、自家米を「皇室新嘗祭献穀米」として献上。天皇陛下に献納する「新嘗祭献穀献納式」に夫婦で参列した。

構成／浅井美江
text by Mie Asai

撮影／世古博久
photo by Hirohisa Seko
2023.3.25／紀北町「かかし農園」にて

になる、すごくいい教材なんだ」と。女房はずっと小学校の教師をしていましたから。

奥田 なるほど。奥様の力も働いて。そうか、米づくりは学習教材。松永さん、ぜひ奥様に会いたいですけど、会えますか？

——松永さんに頼んで、急きよ、奥様のかつ子さんにも来ていただくことに——

奥田 すみません。お忙しいところ。

松永かつ子（以下、**かつ子**） そうなの。忙しいのよ（笑）。いえ、こんな遠方までおいでいただいて、ありがとうございます。

奥田 話をうかがっていて、松永さんの農業への姿勢が普通の人と何か違う…。これは知恵袋がいるなと（笑）。

「米づくりには子どもが学習できることがたくさんある」とおっしゃったそうですが。

かつ子 はい。米づくりはとてもいい学習素材なんです。田植えから刈り取りまで教えられることがいっぱいある。田んぼの草取りなんかもそのまま見せて、子どもたち自身に刈らせたほうが勉強になります。

子どもたちの笑顔を糧に あと10年は頑張りたい

奥田 奥様が小学校の教師になられたきっかけは？

かつ子 （ふふふと笑いながら）「池田・ロバートソン会談」ってご存じですか。

奥田 いや、知らないですねえ。

かつ子 1953年にね、ワシントンD.C.の国務省で、当時の自由党の池田勇人政調会長と、ウォルター・ロバートソン国務次官補が会談をしたんです。その中で池田さんが日本の国づくりを語る中で、「国づくりは人づくり」だと。私が大学の時に聞いた言葉なんですけど。

奥田 ほう…。

かつ子 人づくりをするには教育が肝要で、そのためには教師が必要だと。私、教育学部にながら特に先生になろうとは思っていなかったんだけど、それを聞いて「教師もいいな」と思ってね。

奥田 なるほど！ 教員生活はどうでしたか。

かつ子 楽しかったですよ。力を入れれば入れるほど、生徒たちが伸びてくれてね。教師になってよかったなと今でも思います。

奥田 「国づくりは人づくり」ですか。何か米づくりにも通じるような気がします。

かつ子 はい。子どももお米も野菜も、育てるものはみんな一緒ですよ。

奥田 確かに。“種”そのものの自体の素地がよくても、気候とか整わないと育ちませんし。

かつ子 そう。環境を整えてあげないとね。

奥田 それにしても、米づくり学習や子どもさんの勉強と、松永さんがいろいろされるから奥様も大変なのでは？

かつ子 はい。お父さん（松永さん）はとにかくやさ

こぼれ話

「わ～、綺麗だな～」。一面の菜の花畑。叫ばずにはられない。ジツともしてられない。「いいですか、入っても…」。その時の写真が松永孝さんとのツーショットとなった。畑のど真ん中でお花に囲まれた時、フワフワと蝶にでもなったような気分になった。山あいには川が流れ、帯状に続く土地が孝さんの田んぼ。5ヘクタールと聞いても、その大きさが思い浮かばない。「あそこから、あそこまで」と指し示されて、「広いですねー」とうなった。この段階でとても満足したため、対談を終えた気分となる。なんというか、心の中が“満足”という喜びの気分で充満した感じなのだ。

ここが孝さんの仕事場なんですか？ 聞くまでもなく「そうです。毎日、毎日ですよ」。この同じ場所で…と思っていたら、菜の花の盛りが終わったら、ここの風景は変わる。田植えが始まると田んぼは早苗田となる。天候は毎日少しずつ変わる。稲が伸びて青々とした田園風景は、いつの間にか黄金色に輝く。稲を刈り取ると田んぼは土色に戻る。三重県尾鷲の冬は雪景色かしら。そんなはずはない、紀伊半島は降雨量の多さで有名だ。こうつづるだけで伊勢に4年間住んだことのある体験から雨降りの日の蒸し暑さを思い出す。この蒸し暑さは身体に堪える。孝さんはこの繰り返しを40年続けている。私はというと、毎日、新しい人に会い、話を聞いて記事にする。月に何回かは日本中を歩く。海外にも出向き、昼夜にわたって活動する。帰国する際の疲労感に浸りながら、次の取材地を探す。海外で受ける刺激は強いものの、取材の根を張ることは難しい。何回同じ海外の場所に出向いても、断片的な収穫でしかない。振り返ると、歳をとるに従って、国内のほうが楽しくなったようだ。47都道府県を3周りはしている。好きな街には足しげく、仕事をつくっては通った。もちろん、今もこの行動習性は続いている。

思い起こすと、博多、金沢、高山に向くことが多い。高



山は困ったことに取材先が少ないので、出向く口実を自分で作ることになる。それは押しつけ講演活動だ。今にすると赤面するので、この辺りで孝さんに話題を戻す。

私の性格は“ノマド”（遊牧民＝どんな場所でも仕事する）である。だから、孝さんのような生活スタイルの人をみると、5ヘクタールの農場で365日仕事する人の心境を聞いてみたくなる。そこには意地の悪い自分がいる。「無理をしているのではないか」である。本当のところはどうなんだろう。

『千人回峰』を始めたのは2007年1月からだ。300人を超える方々にお会いした。農業家の方とは初めての対談である。まさに私の真逆に位置する定着型生活スタイルだ。話題を広げる。以前、刀鍛冶の方との取材で、驚いたことがある。その名人はとても限られた仕事場の中で宇宙にまで広がる空間に心を充満させておられる。孝さんにも同種のことを感じた。満ち足りた心をしておられるのだ。刀鍛冶、農業家、新聞記者。それぞれに仕事場のスペースがある。数十坪、5ヘクタール、日本全国。物理的な広さは異なるが、対談すると同じような空気感に共鳴する。居心地の良い空気が漂った。（直）

奥田 では最後に今後のことをうかがいましょう。どうしていけますか。

松永 うーん。後継のこととかいろいろ考えますが、まあ、今はあと10年くらいは頑張るかという気持ちでいます。みんなが喜んでくれることをいいプレッシャーにしてやっていこうと…。

奥田 いい言葉だなあ～。身体に気をつけて頑張ってください。今日はいろいろ教えていただいて、ありがとうございます。奥様にもくれぐれもよろしくお伝えください。

BCNは「ものづくりの環」を支え
育むメディア企業です



——「ものづくりの環」の詩——

ものを使う人がいます
ものを売る人がいます
ものをつくる人がいます

いつの時代も私たちは生活の心地よさを求めます
その意（おもい）が新しいものを生み出す

使う人、売る人、つくる人——
私たちは「ものづくりの環」のなかで
すべての人の心が豊かになることを願っています

株式会社 BCN

<http://www.bcn.co.jp/>

※この記事は、BCN+Rの「千人回峰（対談連載）」で公開中です。
<https://www.bcnretail.com/hitoarite/>